

現実的国際語としての英語の一面 ——エスペラント語と関連して——¹⁾

飯 島 周

現在地球上で人類の使用している自然言語 (natural languages) の数は、分類方法又は基準の取り方によって異なるが、およそ5,000ほどはあると考えられている。その中で、各分野にわたり国際的通用度が最も高いのは、英語と呼ばれる言語体系であり、程度の差はあるが、ほとんど世界各地でのコミュニケーションに利用されている。従って、英語を現実的国際語と呼ぶことが許されるであろう。もちろん、英語がそのような地位を獲得したのは、いわば偶然の歴史的・社会的事情によるものであって、最初からそれを目的としたわけではない。

一方、最初から、国際的コミュニケーションに役立てようという目的で考案された人工言語 (artificial languages) も存在する。その代表として、ある程度成功しているのはエスペラント語 (Esperanto) である。その使用者数はさまざまに推定されているが、総数で100万以上といわれることもあり、世界各地に存在している。ただし、特に東ヨーロッパに集中する傾向があり、さらに世代ごとに学習の度合いが異なり、全体的には、ほとんど常に現勢維持のようである。一部では若年層の学習者数の低下が見られ、むしろ衰退気味との声さえある。

周知の如く、ポーランドのユダヤ系眼科医 L.L.Zamenhof(1859-1917) により、Doktoro Esperanto という偽名で1887年に初めて公表されたこの試みは、諸民族の平和と寛容と統一を目指す宗教的な意味を持っていた。しかし、その歴史は国際的労働運動と深く関係するようになり、政治的意味が前面に出て来た。そのため、1930年代には、ヒトラーとスターリンによって代表されるそれぞれの勢力による弾圧という事態さえ生じた。わが国でも同様で、エスペラント運動は長い間迫害され、又運

動内部での分裂もあり、決して順調ではなかった。

しかし、前述のように、世界各地では現にエスペラント語が使用されており、特に熱心な運動推進者のいる地域では、さかんに宣伝、出版、教育が行われている。全体的な統計は非常に得難いが、1970年代には、世界各地の600以上の教育機関でエスペラント語が教えられ、60ヶ国以上にエスペラント協会があり、地域別の組織は1,250以上あったと言う。又、1966年には、国際連合に対して、公認国際語の地位を要請する署名運動が74ヶ国約100万人によってなされた。この要請は受理されなかったが、以上の数字は、エスペラント語の持つ可能性を暗示するものである。これらについては、資料Iを参照されたい。

それでも、英語全体の広がりにくらべれば、エスペラント語の勢力は微々たるものである。現在、日常生活の中で英語と何等かの関係を持つ人間の数は、少なくとも7億、時には10億以上とも言われる。しかも、その中で約3億が英語を母語²⁾としている。そして、この最後の点、母語として日常生活の支えとなっていることが、英語とエスペラント語との決定的な差と考えられる。もちろん、非常に熱心なエスペランチストたちが家庭や共同社会を結成し、それなりに努力すれば、その子供たちにエスペラント語を自然におぼえさせること、つまりエスペラント語の母語化は可能である。しかし、エスペラント語はわずか100年ほどの歴史しかない人工言語であり、その出発点から英語とは異質と呼び得る目的を持っている。従って、英語と競合する必要は少しもない。ただ、現実にエスペラント語を普及させる運動を進める場合、英語がどのようにして世界各地に定着しているか、言いかえれば、どのように母語化又はクレオール化しているのかの実態を、エスペラント語自体と比較対比しながら検討することは、ある程度参考になるであろう。

まず検討の手がかりとして、エスペラント語（又は国際的使用のための人工言語）についての基本的条件を考察する。この問題に関しては、Crystal (1987 p. 355) に、理想的な人工言語の基準として、要約的に述べれば、次の6点が示されている。すなわち：

(1) 学びやすいこと (Easy to learn) 文法、発音、単語形成法などが、自然言語にくらべて規則的で単純であり、意味関係が明らかなこと。

(2) 母語と関係し得ること (Relatable to mother tongues)

いかなる自然言語にも、又それから比較的容易に翻訳でき、イデオムを反映することが可能で、多くの言語的普遍性を示すこと。

(3) 広範囲の機能を持つこと (A rich range of functions)

日常的な話し言葉、書き言葉として一般的な要求ばかりでなく、科学、宗教、商取引、スポーツ、政治などの専門的な要求をも満たし、国際的コミュニケーションのメディアとしても用いられること。

(4) 標準化されること (Standardized)

方言的な差違がなく、新しい形式の導入に関する審議機関があること。

(5) 中立的であること (Neutral)

政治的、言語的に特定の結びつきを持たないこと。(これは人類の融和と世界平和のために必須の要件と見られている)

(6) 洞察を与えること (Providing insight)

国際的なコミュニケーションがこれらの言語の唯一の目的と考える人たちもいるが、より論理的又は合理的に思考させ、現実の本性についてより深い理解を確立できるように、これらの言語がより規則的で明析であることも望まれている。

以上の6項目は、たしかに妥当性を持つと思われる。そのそれぞれを、まずエスペラント語について検討すれば、ほぼ次のように言えるであろう。

(1)に関して、エスペラント語の規則は、おそらくどの自然言語よりも簡略化されており、文法、語形、発音の各レベルについての規則が、わずかに16項で明示される。語根は約15,000種類設定され、それらの組合

せと接辞の使用により、さらに多数の語が生産される。これらの点では、非常に学びやすく、この基準に十分あてはまる。

(2)については、ヨーロッパのいくつかの有力言語に類似した文法・発音・規則や語彙を借りており、従ってそれらの言語を母語とする人たちには、さらに親しみやすいものになる。その反面、そうでない場合、たとえば日本語を母語とする場合とは明確な差が出て来る。これは、いわゆる国際語と民族語に関して、常に生じ得る問題である。

(3)の範囲は、判定が困難な場合があるが、エスペラント語は一応目標に達していると思われる。特に、国際的コミュニケーションのメディアとしての有用性は否定しがたい。ただし、日常生活の中での全面的なメディアであるとは言えない。

(4)の標準化の点では、一般に方言的変種がなく、すべて統一的である。ただし、語彙については多少ばらつきがあるようだ。時には、単なる単語使用の問題にとどまらず、広い意味での文法に関係することもある。たとえば、関東エスペラント連盟発行の月刊誌 *Ponteto* 1988年2月号 p. 8には、エスペラント語の助動詞 (Helpverbo) についての問答がある。その一部の説明によれば、許可を示す表現、たとえば英語の *you may go* に相当する文としては、

(i) Vi povas/raitas iri.

(ii) Vi durfas iri.

の2種の可能性がある。(i)は標準的であり、一般に認められるが、(ii)は少数派で、ドイツ語 *dürfen* に由来する語を用いており、これを認めない立場が伝統的とされる。筆者の臆測によれば、エスペラント語で *darfi* 又は *durfi* を認めることは一般的に法助動詞 (Modals) のカテゴリーを拡大することになり、事態を複雑にするからであろう³⁾。これは、標準化にとっての重要な問題の一例である。

(5)の中立性については、すでに(2)の考察で述べた通り、言語的基盤が

完全に中立的であるとは言いがたい。しかし政治的中立性は保てるであろうし、その努力はすべきである。

(6)の問題は、エスペラント語自体よりも、むしろ使用者の態度であろう。個々の論理表現は、實際上各言語体系に依存するからである。ただし、すべての自然言語において重要性を持つ情緒的要素は、エスペラント語では比較的少ないようだ⁴⁾。それでも、各種の文学作品がエスペラント語でも試みられており、この分野での使用が不可能ということはない。

以上、総合的に見て、エスペラント語は、上記の6基準のそれぞれに一応適合している。そうだとすれば、最大の問題は、その普及度であろう。もちろん英語の場合とは異なり、エスペラント語の修得による現実的利益は非常に小さく、それが学習者の数に影響するのは当然のことである。

それでは、英語の実態はどうであろうか。まず第一に、現在の英語には数多くの異なる種類 (Varieties) があることを前提にする必要がある。ただし、英語による国際的コミュニケーションは、参加者の母語を基準として、次の3通りに分類できる。

- a. 英語を母語とする人々だけの場合 (たとえばイギリス人とアメリカ人)
- b. 英語を母語とする人々と英語を非母語とする人々の場合 (たとえばアメリカ人と日本人)
- c. 英語を非母語とする人々だけの場合 (たとえば日本人とロシア人)

もちろん、どの場合にも、コミュニケーションの達成度は千差万別である。そして、b.c.については、ほとんど記述不可能である。a.の場合でさえも、それぞれの参加者の英語が異なる種類であることが予測できる。その種類は非常に多い。しかし、ここでは、本来非母語であった英

語が母語化し、日常生活の各面で使用されながら、しかもそれぞれの土地で独特の要素を加味している例だけに限定して、簡単に比較検討してみたい。前述の如く、定着のためにいかに英語が変容しているか、又はカメレオン化しているかが理解できるかも知れない。

英語を非母語としていた地域や人々にとって、英語が母語になって行く過程は、通常ピジン化に始まり、世代的連続性を持つクレオール化を経て、脱クレオール化する、という順序で示される。この過程は、最近の説明法によれば、一つの連続体 (Continuum) で示され、最底辺部の下層言語 (Basilect) から中層言語 (Mesolect) を経て上層言語 (Acrolect) に到達する。最上層言語は、ほとんど標準的な英語であるが、連続体のそれより下の部分はさまざまな段階的様相を持つ。しかし、これはいわゆる文体論的変種で、これと同じ現象は、どの言語にも、又はどの個人にも存在し得るものである。その詳細は省略するが、以下、I. ガイアナクレオール語 (Guyanese Creole)、II. シンガポール英語 (Singapore English)、III. ナイジェリア英語 (Nigerian English) のそれぞれの一部を参考例として取り上げる。

まずガイアナクレオールの例を見る⁵⁾。右列は該当する標準的な英語の文である。

- I. 1. i wok……He worked.
2. i wiiri……He is tired.
3. i a wok……He is working.
4. i a wiiri……He is getting tired.
5. dem a ponish abi……They are making us suffer. (ponish = punish)
6. i bai di eg-dem……He bought the eggs.
7. Jan bin sii wan uman……John had seen a woman.
8. Wisaid yu bin de?……Where have you been?
9. Bill (don) kom fi sii yu……Bill has come/came to see you.

10. mi fi go……I should/ought to go.
11. mi go tel am if mi sii am……I'll tell him if I see him.
12. if mi bin sii am mi bin go tel am……If I had seen him I would have told him.

この表では標準的な英語との対応関係が明らかにされている。単語の形態は、大体推測可能な標準的な英語と一致するが、文法的にはかなり差異がある。たとえば1.2.に示されるように、動詞の過去時制を示す語尾(-ed)やコピュラ(copula)としての *be* が用いられない。3.4.5.では現在進行時制を示すのに-ing 語尾がなく、*a* が用いられる。又、5.では三人称複数主格の代名詞として *dem* が用いられ、単語 *ponish* の意味的なずれがある。6.では複数語尾として *-dem* があらわれ、7.では過去完了形として *bin sii* が、8.では現在完了形として *bin*、9.10では *fi* が *to* の代用、11.では *go tel* が未来時制となっている。12.は文法的形式として最も複雑な部類に属する、いわゆる仮定法 (*Subjunctive Mood*) の過去完了であり、*bin go tel* が過去についての推測をあらわしている。

このような分析で示されるように、一見間に合わせのようなクレオール語にも、明確な体系的基準、すなわち文法がある。ただ、標準的な英語の文法にくらべると、語形や屈折の点でかなり簡略化されており、かつては“初歩的”又は“下等な”言語と評価された。それは偏見と呼んでもよいが、前述の連続体の中では、このクレオール語の状態は下層部分を構成する。その事実は、語形だけを見ても容易に理解できるであろう。ただし、言語の生物学的基礎とも言える、いわゆるバイオプログラム説との関連は速断できない。

次にシンガポール英語の例に移る。これは二人の若い中国系女性のデートでの会話で、()内は説明文で、原文はすべて英語である⁹⁾。

II. (A が靴のためしばきをしている)

B₁: Can fit or not? Not bad what? Cheap what? (What は

ここでは‘you really must agree with me’を表現する)

Can buy lah!

(Bが一足はいてみる)

A₁: Eh, can fit your leg.

(中国語では *feet* と *legs* の区別がない)

B₂: The leg down there a bit uncomfortable.

(別の靴を見る) This one don't have less, ah? (この意味は
'There isn't any discount on these?' である)

I don't want to buy.

A₂: We walk down lah. (この意味は‘let's use the staircase
instead of the lift’である)

B₃: Can also.

上記の例では、語形に関する限り完全に脱クレオール化しているが、会話体であることを考慮に入れても、語法的には標準的な英語とは見なされないものが含まれている。()内の説明の部は除いても、問題が多い。

まず B₁の最後および A₂にある文中の *lah* はおそらく中国語の *la* (了) に対応し、日本語の「……ちゃう」という表現に当るかも知れない。B₂では、最初の文にコピュラ (*be* 動詞など) がなく、2番目の文での *This one don't* は標準的には文法違反である。B₃の *Can also* は独特な表現と思われる。その他の単語や文についての非標準的な使用法も、母語の影響として説明可能であろう。しかし、全体としては英語の一種、又は新英語 (New Englishes)⁷⁾ に属するものと考えざるを得ない。

最後にナイジェリア英語の例になるが、これは文学的な語り (Narrative) の一節である。作者の Amos Tutuola は、英語と似た点が多いとされる母語の Yoruba (Yoruba) でまず書いて、それから英語に訳すといわれ、背景言語の影響が明らかである⁸⁾。

III. When it was early in the morning of the next day, I had not palm-wine to drink at all, and throughout that day I felt not so happy as before ; I was seriously sat down in my parlour, but when it was the third day that I had no plalm-wine at all, all my friends did not come to my house again, they left me there alone, because there was no palm-wine for them to drink.

(Amos Tutuola, *The Palm-Wine Drinkard*, 1952. p. 8)

この一節の中で、*I felt not ……、I was …… sat down、all my friends did not come*などは、明らかに非標準的であるが、前後関係からそれぞれの意味は誤りなく解釈される。標準的には、*I did not feel, I sat down, none of my friends came*などとすべきであろう。標題中の単語 *drinkard* さえ問題である。しかし、Tutuola のこれらの表現は、独自の文体、個性的な文体として、作品の内容的幻想性も手伝い、かえってその評価を高めている。つまり、新しく形成された言語形式が、英語の世界で文化的に非常に高度な機能を果していることになる。

以上、I. II. III. の例によって代表される言語表現は、世界のそれぞれの地域に定着して、日常生活の各レベルで用いられ、標準化又は一般化している。これは動かしがたい事実であろう。そして、前述のように、少なくとも II. III. は、英語と総称される言語体系の一部に組み込まれている。補足的に言えば、英語はもはや単数形の English ではなく、複数形の Englishes で示すべき状態になっている。この状態から生ずる混乱を整理するため、皮肉なことに、逆方向の努力、すなわち統一的な標準形を作り出そうという努力がなされている。R. Quirk などの提唱する中核英語 (Nuclear English)⁹⁾ は、そのような人工語的要素を持つ言語体系の一例である。言いかえれば、現実的国際語としての英語を基盤として、理想的国際語を作ろうという試みと考えられる。実際に、中核英語には、

前述の(1)~(6)までの基準のいくつかに適合する点がある¹⁰⁾。

そのようなわけで、極度に要約的に言えば、現代世界における英語には、日常生活を支える民族語としてその特性を強調する面と、諸民族間のコミュニケーション用の国際語としてそれらの特性を押さえる部分の使いわけが要求されている。これは、いわばすべての文化現象に共通する遠心作用と求心作用の影響である。程度の差はあるが、国際性を持つ他の諸言語、たとえばスペイン語、フランス語、又はアラビア語などにも同じことが言えるであろう。

将来の予見は困難であるが、現在までの傾向で見る限り、世界語として発展する過程の中で、英語はある種の柔軟性を開発して来た。その歴史は、しばしば指摘されるように、高度の屈折・語形変化を持つ総合的なタイプの言語から、屈折をほとんど持たぬ分析的なタイプの言語への変質であり¹¹⁾、内部的に多様な変種を包含する寛容性の獲得である。しかし、前述の16項にわたるエスペラント語の規則は、エスペラント語が国際語として公認されるまで、変更を許されない。一方英語の簡略化は、ある面ではエスペラント語以上に進んでいる。たとえば、エスペラント語の品詞や格を示す語尾——名詞を示す-o、形容詞を示す-a、目的格の-nなど——は英語では見られない。最初に述べたように、エスペラント語がその普及度をもっと高めるには、あるいはこのような点についての工夫が有効かも知れない。

いずれにせよ、エスペラント語が現実的国際語としての地位を確立しようとするなら、英語の場合のように、単数のEsperantoではなく複数のEsperantojを許容せざるを得なくなるのではないだろうか。現実的国際語、古くはヨーロッパ各地に定着しながらやがて分裂してしまったラテン語、そして現代では英語についての人類の経験は、理想的国際語の実現、又は人類の言語的統一は、まだまだ見果てぬ夢であることを示している。

注

- 1) 本小論は、関東エスペラント連盟主催の第37回関東エスペラント大会(1988年6月19日 杉並区第十小学校)での筆者の記念講演『現実的国際語—英語の場合—』の草稿の一部を補正したものである。なお、この小論に関する資料は、III.の部分を除き、〈大会資料 (Kongres-libro)〉に収録されている。
- 2) 英語の *mother tongue* であるが、この用語には多少問題があり、この種の問題に対して *native*、*first*、*dominant* などの形容詞を用いるべきだとの意見もある。なお、「母国語」という訳語は避けた方がよいであろう。「母」と「母国」は異なる概念である。
- 3) 後述の中核英語でも、法助動詞は用いないようにしようという提案がなされている。それは、法助動詞の持つ必然的な多義性のためである。たとえば、英語の *you may go* は、文脈や状況が不明なら、許可、可能、推測など、つまり「してもよい」「できる」「かも知れない」のどれにあたるか決定できない。
- 4) 注1)の講演後のエスペランティストたちとの座談会で、筆者は「エスペラント語で喧嘩ができるか」というやや挑発的な質問を試みた。答は肯定的だったが、「エスペラント語でのしるにはどんな語を用いるか」という質問には明確な答が得られなかった。もっとも、エスペラント語は、喧嘩のために使用されるべきではないだろう。
- 5) この資料は Bickerton (1981) にある引用例の一部を、筆者が説明のために整理したものである。
- 6) Platt (1984) p. 160 による。
- 7) 主として、インド、フィリピン、アフリカなど第3世界に定着した英語の諸変種を示す。
- 8) 邦訳(土屋哲訳『やし酒飲み』晶文社 1970) があるが、文体的特色は邦訳では示されていない。なお、Platt (1984) p. 179 参照。
- 9) 下記資料 I. 参照。
- 10) いわゆる簡約日本語も、日本語による国際的コミュニケーションの達成のための一つの工夫と考えられる。つまり、日本語における一つの機能的変種の人工的育成の試みと解釈できる。ただし、相当の非難攻撃を覚悟しなければならない。たとえば、『朝日ジャーナル』1988年4月29日号参照。
- 11) 英語の発音における短縮傾向もよく指摘される。もちろん逆に、Spelling Pronunciation (たとえば *often* の *t* を発音すること) の傾向もある。参考資料としては、たとえば J. D. Alexander: "The Erosion of English," *English Today*, vol. IV. No. 2. 1988. pp. 17-20 参照。

資料

- I. David Crystal : *The Cambridge Encyclopedia of Language*. Cambridge Univ. Press, 1987 pp. 354-355 ; 358-359
- II. ① Guyanese Creole の例 : Derek Bickerton ; *Roots of Language*. Karoma Publishers, Inc., 1981. 邦訳『言語のルーツ』大修館書店。
② Singapore English の例 ; John Platt et al. : *The New Englishes*. Routledge and Kegan Paul, 1984.